時代に先駆けるもの――後藤慶二と高濱虚子

森　仁史

なにごとにも前兆や前触れというものはある。それは世に先駆けることのできる才ある者の独占するところでもある。前号で触れた堀口たち分離派建築会に先駆けたのは後藤慶二〔図1〕にちがいない。近代日本が西欧の模倣から踏み出し、固有の表現としての造形を目指そうとした時機を建築家が意識し、実践したのは堀口たちが最初だとすれば、後藤はそれを予告する存在だった。以前、広川松五郎と後藤の関わりに触れたが、もう少し考えを進めてみたい。

後藤も堀口同様に東京帝大建築科出身である。物理学者後藤牧太の家に生まれ、小石川幼稚園、高等師範付属小学校、同中学校から四高、帝大へと絵に描いたような秀才コースを歩み続けたのだが、残念ながら大正八年に三十五歳で早世した。当然のように彼の才を惜しみ、建築学会は没後すぐに募金を始め、多くの篤志が寄せられ没後五年に追悼録『後藤慶二氏遺稿』が編まれた。

1　南薫造筆《後藤慶二肖像》　油彩

後藤が高等学校時代から、学業と同様に打ち込んだのは謡曲であった。『能楽』に山崎静太郎が地拍子論を連載していたが、山崎は後藤の帝大同期生であった。後藤の謡曲趣味の機縁からか『能楽』の雑誌表紙絵を後藤鶏児の名で手がけている。この連載は大正四年に『独習用謡曲地拍子精義』として同じわんや江島謡曲書肆から出版され、これも装幀を後藤が担当した。この『能楽』は高濱虚子の兄池内信嘉が明治三十五年に創刊したもので、彼はこの年伊予鉄道支配人を辞して上京し、以後生涯能楽復興に尽力した。池内が後に編集出版した『能楽盛衰記』上下二冊は成立から明治までの能楽を述して余すところがない。彼の活動により、ようやく昭和五年東京美術学校に能楽科が設置され、彼は翌年同校教授となった。この池内家というのは松山藩で祐筆、剣術監を務める家柄であり、長州征伐には二度とも出陣している。高濱虚子はこの池内家の三男に生まれ、一族の高濱家の養子となったのだった。言うまでもなく虚子は子規の後継者であり、河東碧梧桐とは中学校の頃からの同志であった。かれらは皆旧松山藩士の子弟であり、なかでも池内家は廃藩後能衣装を拝領し、能会を主催していた。後に、高濱は断固とした月並派となり、河東は新興派として路を異とした。二人は能楽の世界では以前と同じく交流を続け、友情は絶えることはなかった。興味深いのは高濱が断固新作支持であり、河東が伝統曲支持と、俳句とは対照的な立場だったことである。

後藤は明治三十八年には白馬会菊坂研究所に通い、一時は画家を選ぼうかと思うほどに画才に恵まれていた。辰野金吾の還暦祝いに恩師の東京駅、日本銀行などの設計作四十五点をひとつの街区にまとめて描いた油画《辰野金吾博士作品集成絵図》を制作している。これらのほか、『建築工芸叢誌』〔図2〕、『建築雑誌』、『建築世界』、『現代之建築』など当時の代表的な誌面の多くにグラフィックの才能を発揮している。

後藤は東京帝大卒業とともに明治四十二年司法省に技師として就職し、

その最初のしごとが豊多摩監獄の設計であった。近代法制に基づく刑務所の建設も近代日本の課題だったのだ。あたかも地表を突き破って起き上がったかのごとき力感溢れる姿と煉瓦造による彫りの深い表情は日本の表現主義造型として建築界に大きなインパクトを与えた。後藤自身によるこの建物のスケッチは大正二年の『ホトトギス』裏絵を飾っている〔図3〕。木茂先生もしばしば指摘しているように、『ホトトギス』は浅井忠、中村不折など画家との関わりを積極的に誌面にとり込んだ雑誌であり、石版多色刷りの表紙と裏絵はその選択眼の確かさゆえになかなか見ごたえがある。例えばフランスから帰国した中村不折の携えてきた滞欧作やフランス人作家の近作などを特集した『ホトトギス臨時増刊　仏国土産』（明治三十八年）などは近代的な画集の魁ともいうべき試みとなっている。

2 『建築工芸叢誌』第二号（明治45年）

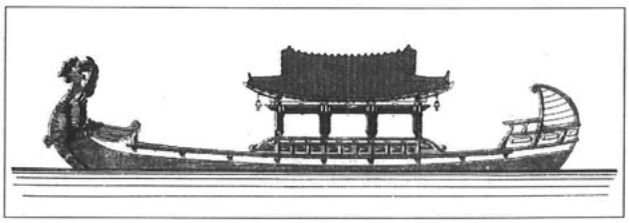
大杉栄は大正四年一月竣工二年後にここで服役した。それ以前は「千葉監獄は将に社会党監獄の観があった程」だったが、この頃に中野の「新式の豊多摩監獄」が使われるようになった。「豊多摩監獄から」と名づけたエッセイで、「此の監獄の造りは、今まで居た何処のとも一寸違ふが、西洋の本ではお馴染みの、あのベルクマンの本の中にある絵、その儘のものだ。まだ新しいのできれいで気持がいゝ。」とその近代性に気づいている。

3 後藤慶二筆裏絵《自分の建てた監獄》
（『ホトトギス』第16巻4号、大正2年1月）

この刑務所は思想犯を収容する刑務所として知られるようになり、亀井勝一郎（昭和三―五年）、小林多喜二（昭和五―六年）、中野重治（昭和五、七―九年）、河上肇（昭和八―十二年）、埴谷雄高（昭和七―八、十六年）、宮川寅雄（昭和八―九年）らが収監され、最近では一九七二年藤本敏夫もここで服役した。この建物は残念ながら一九八三年取り壊され、今ではかつての門前と思しき辺りに妙に大きな花屋があり、その先にただ旧監獄の入口の一部だけが保存され、わずかにかつての残り香をふりまいている。

大正二年に後藤は「能画」や「噴水」などを題材にした表紙絵を『ホトトギス』に同じく鶏児の名で何度か描いていて、虚子との関わりも最も濃密だったようである。

虚子は明治四十四年朝鮮を旅行し、当時熱中していた写生文による「朝鮮」という作品を発表した。その主題は平壌郊外の牡丹台公園内の大同江畔にある伝説にまつわる茶店で、虚子の命名によってお牧の茶屋と呼ばれるようになった。高濱はこの旅行中に松山で生き別れた叔父に会ったとい


4 後藤慶二「大同画舫設計図」
（『ホトトギス』第18巻11号、大正4年8月）

うが、こんなところにも維新後の松山藩の帰趨が影を落としている。大正四年、『ホトトギス』二百号記念事業としてここに画舫を贈ることが計画され、虚子から後藤にその設計が依頼された。後藤の船のスケッチ〔図4〕は監獄とは対照的に優美さと陳腐に落ちない様式美とのあわいに踏みとどまっているようだ。後藤は監獄竣工直後のこの年に朝鮮総督府の嘱託となって朝鮮に渡り、関野貞とともに古墳調査に従事した。この旅行時のスケッチが幾枚も『ホトトギス』に裏絵や挿絵として掲載されている、いずれもまだ中世さながらの風俗が素直な眼で描かれている。後藤は旅行中総督府に画舫の建造に当たった担当者を訪れ、進捗にもたちあっている。画舫は平壌名勝古跡保存協会の手で同年九月二十四日皇霊祭を卜して無事進水式が行われ、楽浪丸と名付けられた。

ところで、高濱が『ホトトギス』再興に努めていた頃住まったのは牛込船河原町にあり、ここがしばらく雑誌発行所であったが、ごく普通の和風住宅のようである。後明治四十三年に鎌倉に転居し、そこから毎日のように電車で発行所に通った。大正十年に東京駅前に丸ビルの建設が始まり、それを目にした高浜はこのビルに事務所を移すことを考え、三菱地所に申し込んだ。当時の文学団体としては甚だ異例なことだったが、翌年最新鋭のビジネスビルの一角に事務所を構えることになった。これは一時の気まぐれでなく、その後もずっとここに発行所を置き、時期によっては家族や縁者のために借り増してすらいる。『虚子自伝』にはその顛末は淡々と綴られているが、動機には全く触れられていない。

高濱の妻大畠いとは前橋の生まれでギリシャ正教徒であり、長男年尾がホトトギスを継ぎ、次男の友次郎は池内本家を嗣ぎ、幼少期には能楽に親しんだが、長じて西洋音楽に志し、ついには慶應義塾大学を中退し昭和二年に虚子の援助でフランスに渡り、翌年にはコンセルヴァトワールに入学を果たし、和声を学んだ。昭和五年に一時帰国するが、七年までパリで作曲に励んだ。昭和十二年から長く日大芸術科で教えたが、戦後は昭和二十二年に東京音楽学校教授となり、その後芸大で四十九年まで教壇にたった。この間、昭和十一年に虚子、妹とヨーロッパを旅行し、虚子も欧州を存分に堪能したようである。まことに月並みとはこのような振幅を飲み込んだうえに成り立つと解すべきなのだろう。

後藤が没して一年後の命日二月三日に、岡田信一郎、薬師寺主計、竹内六蔵ほかが発起人となり、故後藤慶二君追悼会が建築学会倶楽部室で催され、六十名ほどが集まった。会は岡田の司会で、司法省の後輩山下啓次郎や国民美術協会で知り合った石井柏亭のほか、建築家として野田俊彦、曾禰達蔵、山崎静太郎、今和次郎、佐野利器、美術家では大野隆徳、津田青楓、黒田朋信らが出席し後藤を偲んで思い出を語り合った。会場には南薫造が描いた肖像画が掲げられたが、後藤はこの南（大正八年）と大野隆徳のアトリエ（大正六年）を設計している。最後に後藤牧太が謝辞を述べ散会した。後藤の才能の豊かさは一方で先端的な表現を存分に駆使するだけでなく、他方でそれを積み上げる土台にも並外れた成果をあげるあたりに窺い知ることができる。だからこそ、豊多摩監獄や東京区裁判所で若い世代を刺激しつつ、他方で『日本劇場史』（大正十三年）から『鉄筋混凝土構造』（大正十五年）にいたる業績が残せたのだろう。

この大正九（一九二〇）年は本当に劇的な年になった。三月二十九日には前年没した辰野金吾の追憶会が東京帝大山上御殿会議場で催され、四月十八日にJ・コンドル博士表彰式が建築学会によって上野精養軒に開かれたが、コンドルはこの二月後に急逝してしまう。旧門弟がこの年初めに先生の肖像画を贈ることを計画し、初め石橋和訓の名が挙がったが、帰省中だったため白滝幾之助に依頼し、五月中旬に制作された。この《コンデル博士の像》がしかめっ面なのは体調がよくなかったのである。他方で、二月一日に分離派建築会が結成され、五月二日に第一回のメーデーが上野公園で開かれた。既に前年都市計画法、市街地建築物法が公布され、この年十二月に施行され、本格的な都市計画が日本でも現実のものとなろうとしていた。歴史にはこのような鮮かな新旧の交代を告げる時があるものだ。後藤の生涯と業績はひときわ目を引く分水嶺をなしているように見える。

一寸

第二十五号　二〇〇六年二月

第二十五号目次

新・旧刊案内25　火野葦平『小説　陸軍』のことなど　青木　茂　1
泉鏡花『風流線』『続風流線』をめぐる鏑木清方と鰭崎英朋　岩切信一郎　5
《朝霧》と昭和五年作問題（その3）―藤牧版画の後摺りについて12　大谷　芳久　11
小山正太郎研究拾遺（七）　高野山金剛峯寺厨房　金子　一夫　20
秋艸雑記　劉生・大正十年断片――表紙図案から　丹尾　安典　23
時代に先駆けるもの――後藤慶二と高濱虚子　森　登　26
小林かいち（五）　閑話休急　森　仁史　31
山田　俊幸　34

新・旧刊案内25
火野葦平『小説　陸軍』のことなど

青木　茂

■僕の手許に合本済の日本山岳会『会報』一〇一―一三〇号（昭和十六年一月―十九年三・四月）がある。『一寸』読者向きではないが毎号に図書紹介があり、十八年三月末の日本山岳会財産目録に洋書六一九冊、和書二七三六冊があり、図書基金を受入れ、図書室は日曜以外は毎日十二時から五時または八時まで開室していたりする。僕の周辺に山好きはあまりいないので、次の一事のみでこの『会報』の紹介を終える。二色刷りの会報に最後まで「ルックサックの専門店　片桐テント店」または「片桐テント登山具店」は広告を出し続けるが、一〇五号（昭和十六年五月）から麻防水布製キスリング型（E式）ルックサックの例えば大型二尺が二五円三〇銭と価額入りで載る。暫くして一一二号（同年十二月）で同型は二七円六〇銭になり「右は物品税二割を加へた改正値段です　御諒承下さい」となる。間もなく一一九号（十七年九・十月合併号）から最後までルックサックは「御手元にある布地御持参になれば御作り致します」となる。僕のところの最終号には「出版界の整理も相当に進んだやうでありますが、本会報などは別に影響も受けないものと思はれます。どうぞ御安心下さい。」ともあるが「本号は特に急いで刊行せねばならぬ事情があります」ともある。僕には特に急いで刊行しても出版界の整理の影響を受けて、この一三〇号（十九年三・四月合併号）が終刊もしくは一時休刊号になったのだと思われる。

手許にあったので日本山岳会々報から始まったが

・桑原武夫『回想の山山』昭和十九年四月三十日（五千部）、七丈書院、B